

一般部門

一般部門
優秀賞

Nさんからの卒業証書

【福島県・伊東伸也^{いとう しんや}】

脳内出血で倒れ、ようやく、今、自分の置かれている状況について理解できるようになったころ、担当看護師のNさんに「伊東さんは、学校の先生なんですか」と尋ねられました。

「そうだよ。今は、小学校の教員だけど、中学や高校で国語を教える資格も持っているよ」

「へーっ。私、国語って一番苦手だったんですよ」

「じゃあ、担当してもらっている間、Nさんの家庭(?)教師してあげようか」

こうして一日数分ではありますが、点滴のつけ外しのような時間に、Nさんに短歌や俳句の味わい方をレクチャーする日々が始まりました。

二カ月の後、リハビリが主となる病院への転院が決まると、Nさんから小さな花束を添えた卒業証書をいただきました。

教えた方ではなく教えられた方からの卒業証書。

「三つ子の魂百まで」と言いますが、Nさんとのやりとりの中で、私の身体の中に培われてきた教員としての血を目覚めさせてくれたように思います。この病は、後遺症はもちろんですが、それより精神的なダメージが日常生活や社会復帰の妨げとなるのだと後々知るようになります。

意図されたものだったのでしょうか。Nさんとの何気ないやりとりは、実は私の本能を目覚めさせ、前向きに生きていこうとする気持ちを育んでくれていたのだと気付いたのは、転院の後、しばらくしてからでした。

数カ月後、退院、復職を果たし、不自由ながら社会生活を営むことができるようになりました。子どもたちと、日々楽しくすごしながら、折に触れNさんを思い出し、感謝しています。

色あせた卒業証書は、書斎にかざってあります。